



WINDOW

窓

5月の風が、ブーンという蜜蜂の羽音と共に、部屋の中まで花の香りを運んで来た。風が鼻をくすぐって、夕べも宵っ張りだった女の眠気を誘い、青白い表情の少女は一心に窓の外を眺めている。

「窓が話しかけてくるからよ」と、少女は小さくつぶやいた。眠りかけていた女は体を起こし、少女の横顔を見つめた。

「信じないでしょう？ 信じなくていいわ」

少女は女が何か言いたそうに唇を動かそうとするのをさえぎって話しつづけた。

「ママが心配しているように、ひとり言を言っているわけじゃないの…」

「仲良しなのね、角のお医者さんの家の小さな窓。本屋さんちの窓も私が学校から帰ってくるのをいつも待っていてくれるわ。でもうさくて意地悪な窓もあるの、母親はため息まじりに、少女の話をさえぎった。

「あなたは、しばらく病気で寝込んでたから…寂しかったのね、きっと。悪かったわあなたをひとりぼっちにして…ママもいろいろ大変なのよ。お仕事やそれに…あなたもわかってるでしょう？」と、少女の顔を覗き込んだ。

少女は窓を見るのをやめて母親の顔を真剣な目を見上げた。

「そんなんじゃないの。本当に…今ね、わたし、とても困ってる事があるの」「どうしたの？」

「恋…したの」少女は、ゆっくりと、言った。

女は、安心したように笑って聞いた。「え？ だれ？ どの子？ クラスの子ね？」

少女は首を横に振って言った。「…窓に…恋したの」

「ええ！ 誰にですって？ お願いだからママをこれ以上責めないでちょうだい」

少女は、母親に悩みを聞いてもらう事をあきらめた。

少女が恋したのは、庭に大きなモクレンの木がある家の二階の窓だった。

少女は、しばらくして、また病に臥せてしまった。寂しかった少女は、こんどは椅子と話してみた。少女が生まれる前からその部屋にあった古い椅子は、昔の色々な事を記憶していた。少女の窓の話もまじめに聞いてくれて、「わかるよ」というように、足をコトコトと鳴らした。少女はモクレンの木の窓のことを忘れる事はなかった。春が終わり、夏が過ぎ、秋の気配を感じる頃、やっと外に出られるようになった少女は胸をときめかせて「窓」に会いに行った。

何も無いアルミサッシの窓。いつもカーテンが引かれ、夜になるとカーテン越しに温かい光が灯る。そして、バイオリンの音色が聞こえてくる。高く、低く、たどたどしく、時には滑らかに聞こえてくる。

少女は、窓を見つめながらバイオリンの音色を聞き、目にいっぱい涙をためた。木枯らしが落ち葉を舞い上げる頃、少女はもう一度病の床についた。

そして、もう二度とモクレンの木の窓に会いに行く事はできなかった。

部屋には、古ぼけた椅子だけが一つ、残っていた。

COLUMN

鎌倉の猫事情 第七話

いよいよ、子猫を迎えに行くという日、期待をふくらませて約束の待ち合わせ場所名古屋の大須観音へとトラックを走らせました。子猫の受け渡しがない、観音様なのか不思議に思われるのですが、大須観音では月に2度骨董市が開かれており、その日には業者間の取引や情報交換なども行われます。どうせなら猫だけでなく、家具も積み込んでおこうと言うわけです。そんなわけで、うちにとっても古田さんにとってもこの場所が都合が良いのです。ミルクホールでは、長年の愛猫シュガーちゃんが亡くなってしばらくすると、厨房担当からは、「こういう古い家では、いつネズミが出るかわかりませんよ。心配だから早く子猫をもらってください」という要求があり、また単に猫好きのスタッフからも「早く、子猫を」という声がある中、ようやく決まった子猫です。鎌倉を出発する際も、皆「明日は、ネオキャットが来るのですね」と嬉しそうに見送ってくれました。この人達が皆あとで泣きを見ることになるのは、この時にはまだ知る由もありませんでした。

待ち合わせは、朝6時。骨董やさんの朝は早いのです。まだ薄暗いなか、古田さんのいる場所に向かいました。向こうでも待ち構えていて「ほらほら、この子やねん。可愛いでしょ？」と、顔を見るなり、手の中にすっぽり入るくらいのに小さな茶色の固まりを渡されたのです。手の中に入ったとたん、その小さなうちみたいなやつどこからこんな大きな声が出るのかというほど、四肢をひろげてけたたましく鳴き始めました。

それを聞きつけた仲間達が商売を放り出して、「猫や、猫や」と嬉しそうに何人も集まってきました。骨董やさんはなぜか全国的に皆猫好きなのです。ちょっと想像してみてください。夜明け前の観音様の境内で、泣き叫ぶ子猫を人相の悪いおやじ達取り囲んでいる図。不気味なものでしょ？ 古田さんが「今年はどういうわけか春になっても犬しかおらんかったん。どないしょか、ミルクホールさんの子猫はと、困ったところ、この仔が3匹で捨てられてたんです」と、説明している間も子猫はぎゃあぎゃあ鳴きつづけている。「可愛いじゃろ？」「え？ …ん…ん…」可愛いと言われても、顔一杯に口を開けて鳴いているのでどんな顔かわからないのです。体はふわふわのうぶ毛のような茶色の毛に被われて、耳と手足の先っぽが黒いみたい…「これ、シャム猫ですか？」「そうみたいやな。他の2匹はこんなとは違うけどな。とにかく、こいつが一番元気だったんよ」「へえ、シャム猫も捨てられるの？」実は少し当惑していました。耳の黒い猫を飼うなんて、思ってもみませんでしたから…猫と言えば、三毛かトラで、こたつで丸まって寝てるというイメージしかないのです。シャム猫もこたつで丸まるのでしょうか。シャム猫といえば猫の世界では悪役の代表みたいなものでしょう？ 強盗の手先みたいな…こたつ丸くなるというより、大理石の暖炉の上で胸を張って威張っているという



感じがしませんか？ 不安がよぎります。古田さんの奥さんが、「はい、これがこの仔のお弁当に、水筒、それにおしこのマットが敷いてあります」と籠に色々用意して渡してくれました。…そんなものが必須とはちょっとも気づきませんでした。そして「道中、お気をつけて！」と送り出してくれました。私達はよくよくお礼を言い、今度は籠を返しに来ますと約束をして、観音様を後にしました。前日のうちに、守備よく積んだ家具類と、耳の黒い子猫を乗せたトラックが鎌倉へと急ぎます。

to be continued
前号で、子猫を探してくれた古田さんの名を古川さんと書き違えてしまいました。お詫びをし、訂正させていただきます